

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
大学院生研究
2008年度研究成果報告書

| | | | | | |
|----------------|----------------------------------|--|----------------|------------|------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | | | 文学研究科 | 史学専攻 |
| 指導員 | 所属・職名 | | 氏名 | | |
| | 文学部・教授 | | 弘末 雅士 印 | | |
| 自然・人文の別 | 自然 ・ ○人文 | | 個人・共同の別 | ○個人 ・ 共同 名 | |
| 研究課題名 | 17世紀ジャワ北岸地域における貿易と社会の変化とトルノジョヨ反乱 | | | | |
| 研究代表者 | 在籍研究科・専攻・学年 | | 氏名 | | |
| | 文学研究科・史学専攻・後期5年 | | 久礼 克季 印 | | |
| 研究組織 | 在籍研究科・専攻・学年 | | 氏名 | | |
| | | | | | |
| 研究期間 | 2008 | | 年度 | | |
| 研究経費 | 20 | | 千円 | | |

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、17世紀ジャワ北岸地域で起こった貿易ならびに社会の変化と、それらの当該地域への影響について歴史的に考察するものである。

具体的には、まず史料となるオランダ東インド会社(Vereenighde OostIndische Compagnie、以下VOCと略す)の文書を調査ならびに収集を行う。そして収集した各文書を用いて、17世紀当該地域でみられた砂糖や木材輸出への貿易の変化、貿易に密接にかかわっていたとされる華人の現地への流入をはじめとする現地社会の変化、またそれらとトルノジョヨ反乱(1676-79)との関連を考察し把握していく。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入）

[砂糖] [華人] [トルノジョヨ反乱]

研究課題の概要 (図グラフ等使用しないこと)

本研究では、オランダ国立文書館(Nationale Archief)にて、同館が所蔵する VOC 文書から、一次史料となる中部ジャワのジュパラ(Jepara)や東部ジャワのグレシク(Gresik)などの北岸各地域とバタヴィア(Batavia)との往復書簡をはじめとする 17 世紀ジャワ北岸地域に関係する記事の調査ならびに収集を行い、当該時代の同地域について検討を行った。その成果は以下にまとめた通りである。

1. 問題の所在

17 世紀のジャワ島にかんしては、これまで主に 2 つの側面から研究が行われてきた。1 つ目は、当時のジャワ北岸地域における社会経済の研究。2 つ目は、トルノジョヨ(Trunajaya)反乱を扱った研究である。前者については、1680 年以降ジャワ北岸地域に華人が流入し、現地のジャワ人有力者、VOC とが結びついて、特に藍(乾燥藍)とコーヒーを中心とした商品作物の生産と貿易の体制を構築し、18 世紀まで活発に経済活動を展開して利益をあげていったとする一方で、それ以前については、華人流入は少なく三者の接触があまりなかったため貿易もそれ以後の時代と比べて活発でなかったとする[Nagtehaal 1996]。また後者については、トルノジョヨ反乱を当時のマタラム王アマンクラット 1 世(Amangkurat I, 位: 1646-77)の強圧的な中央集権政策に対して起こった「反マタラム反乱」と位置づける[de Graaf 1940, 1952, 1960-62]。

しかしながら、前者についての研究は、藍、コーヒー導入以前の 17 世紀のジャワ北岸地域において、既に相当数の華人が流入し商品作物である砂糖の貿易が活発に行われていたことを考慮していない。また後者についても、従来述べられてきた「反マタラム」という要素に加え、上述したような 17 世紀における貿易の変化が現地社会へ与えた影響を考える必要がある。

2. 17 世紀ジャワ島における貿易の変化

もともと、16 世紀以前からジャワ北岸地域は、香辛料貿易によって繁栄していた地域として知られていたが、17 世紀初頭、内陸部より勢力を拡大したマタラムの北岸地域への征服活動をはじめとする干渉や、バタヴィアを拠点に活動を拡大した VOC によるマルク諸島やバンダ諸島征服等の香辛料貿易政策による影響を受け、一時的に貿易活動が活発でない状態に陥った。だが、各史料をみると、ジャワ北岸地域の貿易は、先行研究が指摘するように 1680 年まで停滞したことは決してなく、17 世紀中葉、特に 1660 年代以降バタヴィアとの貿易を通じた形態に変化させて再び活発となったことがわかる。

一方、当時のジャワ北岸地域における主要な港であったジュパラやグレシクから 17 世紀中葉以降バタヴィアへ輸出された貿易品をみると、それ以前の時代において主要な貿易品であった香辛料が全く見られなくなる一方で、砂糖や木材が急増していくことがわかる。このうち砂糖輸出の増加については、当時ペルシャをはじめ中国、広南、日本などへの砂糖需要が増加するなか、アジアにおいて最も主要な生産地であった台湾が 1661 年に鄭氏による攻撃を受け翌 1662 年には占領されたことで同地からのバタヴィアへの砂糖の供給がストップしたことにより、その代替となる砂糖の供給地が必要となったことが要因としてあげられる。また、当時砂糖の主要生産地の一つであったベンガルで生産された砂糖に比べジャワ産砂糖の価格ならびに品質が安定していたことも、この一因となった。一方、木材についても、もともとジャワ北岸地域が良質な木材を産出することで知られていたのに加え、1660 年代以降南スラウェシのマカッサル王国と VOC との緊張関係が激化しマカッサル戦争に至ったことに起因する船舶の需要拡大や、貿易の再活発化に伴うジャワ各地での港湾施設や商館等の建築物の需要拡大、製糖用燃料需要の拡大、木製日用品需要の拡大が、輸出を急増させた背景として考えられる。

3. ジャワ北岸地域への華人流入とジャワ人有力者、VOC との関係の形成

17 世紀中葉以降ジャワ北岸地域において砂糖や木材の輸出が貿易の中心となった背景には、ジャワ北岸地域における華人の存在がある。当時当該地域においてサトウキビ生産や製糖技術を持っているのは華人だったことから、その生産と貿易は華人主導によって行われており、木材についても切り出しや港までの運搬の管理やバタヴィアへの輸出に華人が関わっていたことがわかる。従来、ジャワ北岸地域への華人流入は、トルノジョヨ反乱終結や北岸各地域における VOC 拠点確立によってバタヴィアやバンテンから流入した 1679-80 年と、1684 年清の遷界令が解除されたことに伴って中国本国から流入した 1695-1710 年の二つの時期に大規模なされたとされてきた。しかしながら、上記の事実を考慮した場合、17 世紀半ばには 1660 年代までに相当数の華人が北岸地域に流入していなければならない。また、第 1 波とされる時期に流入した華人の中には、後述するトルノジョヨ反乱での避難民が多数含まれていたことを考える必要がある。ジャワ北岸地域への華人流入は、1620 年代

研究成果の概要 つづき

に VOC の奨励によるバタヴィアへの華人流入が始まったのとほぼ同時期に、バタヴィアを経由した形や中国から直接流入する形で行われていたと考えられる。そして、1660 年代までにジャワ北岸地域に移住した華人は、貿易を中心に現地で活発な活動を行うなかで華人居住区を形成していき、シャーバンドル(港湾長官)をはじめ現地で有力となる者も現れるようになった。

このような華人や彼らの居住するジャワ北岸地域、なかでも特にジュパラに対しては、VOC が 1660 年代以降大きな関心を示し関わっていくようになったことが史料からわかる。ジュパラでは、オランダ人理事官 (*resident*) が華人に家屋を売却する事例や、華人と VOC との間に密接な関係があったことで知られるバタヴィアと全く同様に会社の書簡を華人が運搬するという事例が見られた。一方で VOC はジュパラのジャワ人の現地首長 (*bupati, regent*) に対して当時のマタラム王アマンクラット 1 世に次ぐ額の贈与を行い、同様に華人も現地首長に対して綿布やアヘンなどの贈与を行っていたことが、史料に現れている。このような贈与の背景には、VOC や華人が現地首長への贈与を通じてジュパラをはじめとするジャワ北岸地域との貿易を円滑に進めようとした意図があるとみられる。これらの事例から、ジャワ北岸地域において、現地首長をはじめとするジャワ人有力者、VOC、華人の結びつきが、1660 年代には既に見られ始めていたといえる。

4. 現地社会のジャワ人とトルノジョヨ反乱

一方で、有力者以外のジャワ人は、砂糖や木材の貿易の中心を担った華人有力者の下でサトウキビ栽培者や木材の切り出し手として関わっていくようになったとみられる。彼らに関する当該時代における動きや、トルノジョヨ反乱との関連については、まだ収集した史料を読み込んでいる途中であり、現在まで判明した事例と可能性を提示するにとどめる。

現在まで判明していることは、トルノジョヨ反乱直前 1674-75 年のジャワ全島において主食である米の凶作が発生したことで米価が高騰して極端に不足する事態が発生したこと、また同時期にそれまでの森林伐採の影響で現地の木材産出が極端に減少し始めたことにより木材の切り出し手と華人の間で緊張関係が激化し、彼らが木材切り出しの作業を放棄して米作を行う事態が発生したことである。一方、トルノジョヨ反乱については、グレシクなど東部ジャワ一部地域を除いた北岸地域ではほぼ全ての華人がバタヴィアやバンテンに逃れた事例や、反乱軍が侵攻したジャワ北岸の各地域で華人を殺害するという事例が判明している。

このような事例をみる限り、もともとはジャワに隣接するマドゥラ島から始まり「反マタラム」の反乱として始まったトルノジョヨ反乱は、これら多くのジャワ人が加り華人を襲撃していったことによって、中・東部ジャワを巻き込んだ大規模なものに展開した可能性が高いのではないだろうか。

5. まとめ

1 から 4 まで述べてきたことをから、次のことがいえる。

16 世紀以前香辛料の中継貿易や補給地として繁栄していたジャワ北岸地域の貿易活動は、17 世紀前半に入るとマタラムの干渉や VOC による香辛料貿易政策の影響により一時不活発となる。しかしながら、その後 17 世紀中葉までに多くの華人が流入し、バタヴィアへの砂糖や木材の輸出を中心とすることによって貿易は再び活発になりはじめ、1660 年以降盛んとなった。こういった状況のなかで、VOC はそれまでと比べて現地への関心を高めて積極的に関わっていくようになり、当該地域において華人、VOC、現地首長をはじめとするジャワ人有力者の三者が結びついて活発に貿易活動を展開していくようになった。この時代に形成され始めた三者による貿易の体制は、その後 18 世紀末まで続くことになる。一方で、現地の多くのジャワ人は、華人有力者の下でサトウキビ栽培者や木材の切り出し手となったとみられる。そして、このような大多数のジャワ人が 1674 年からの米不足を契機に華人との緊張関係を激化させたなか、1676 年に始まったトルノジョヨ反乱は、このような華人を取り込んで大きく展開した可能性が高い。

以上の本研究の成果から、ジャワ北岸地域では、18 世紀末まで続くような社会経済体制が、これまで言われてきたような 1680 年代以降ではなく、既に 1660 年代までには形成されていたといえることができる。